あれこれ

私のたたかいの記録

平田宗男

'75.8.23

あれこれ

私のたたかいの記録

平田宗男

あれこれ　―私のたたかいの記録―

1986年7月27日　発行

著　者
発行者　平　田　宗　男

熊本市神水2丁目16―12
☎096-381-1794

印刷　あかつき印刷
製本　松本文具工作所

目次

随筆集を出すに当って……五
兄の思い出……七

第一章

久大精神科医局当時の思い出……一六
欣さんの思い出……二五
欣さんの十七回忌……三七
故田中正文君を偲んで……四一
白山の思い出……四八
あれこれ……五四

若月俊一著「村で病気とたたかう」を読んで……五七
敗戦当時のこと……六一
トルストイの「復活」を読んで……六四
「甘木問題」を中心にして……六九

第二章

三井三池炭鉱のたたかい……七六
三池炭鉱爆発後のたたかい……八二
興国人絹八代工場における血管障害型慢性二硫化炭素中毒の二症例……九〇
水俣病県民会議医師団活動報告……一一八
田浦町集検報告……一三〇
老精神科医の話……一四〇
精神病院における老人問題の位置づけ……一四九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第三章（熊本のこと、古稀の祝、私の病気のこと）

熊本保養院二十年の歩み……一六四
熊本保養院開設二十五周年の感想……一七五
熊本保養院の三十年（あるべき医療を求めて）……一七八
熊本の精神科風景……一八四
宮川九平太教授を偲んで……一九四
立津教授に捧げる……一九七
立津先生のお別れ講演を聞いて……二〇三
パウラス先生の思い出……二〇七
ごあいさつ（一九七九年八月二三日、古稀の祝にて）……二〇九
樺島春男を送る……二一九
入院の記……二二六
病気見舞への御礼状……二三九

随筆集を出すに当って

私も七六歳になりましたが、昨年六月には肺梗塞という珍らしい病気に罹り、危ふく命拾いしました。老令になるとどんな大病に侵されるかもしれず、少々心細くなりました。私はこの三〇年来いろんな方面に頭をつっこんだので、駄文が大分たまりました。こんな駄文を見せられる読者は迷惑と思いますが、まわりの者がしきりに書け書けと言います。私の四国宇和島の親友渡部欣一郎は五八歳の若さで亡くなり、先年一七回忌をやりましたが、話題が単純でなにか書いておいてくれていたらと思いました。

私にも子供がいますが、「俺はこんな考え方で、人生を送ったのだ」ということを書き残すのは、私が死んだあとで、子供たちの話の種になるかもしれないと思います。こんなことから随筆集を出すことを決めました。多くの記事のなかに、二〜三でも面白いことがありましたら、望外の喜びです。

私の随筆の整理の仕方は、年一回発行される同門会誌に書いたもの、次に内容が社会医学的色彩の濃い学会、学術論文、その他、第三は熊本の民医連（民主医療機関連合会）の

こと、熊本のこと、私の私事に関するものを集めたものです。

年をとるとつらの皮が厚くなり、駄文も平気になる傾向があるので、随筆集を出すことに決めました。どうぞ我慢して、沢山の方に読んでもらいたいと思っています。

随筆集の名前を、「あれこれ」とつけました。

兄の思い出

兄平田重男は一九八四年八月二三日午后三時三分、五年前手術した肺癌の増悪で亡くなりました。八〇歳でした。兄弟のなかで兄に最も接触していた私は、思い出の記を書かねばならぬ義務を感じました。この別れの言葉が遺族、親戚その他兄が生前お世話になった方々に、兄を思い出すきずなにでもなれば幸いです。

兄も私も宮崎県えびの市の加久藤に生れました。父の郷里は長崎県の島原ですが、生活が苦しく、両親とともに加久藤に流れてきたらしい。母は熊本県の天草で生れたのですが、幼時両親について熊本県球磨郡黒肥地村に移住、そこで両親は大変苦労して小さな焼酎製造業（園の露）をはじめました。母園田ハツは同胞が多かったので、子守のために小学校にも行けず、老年になって平仮名を覚えました。母が何故家の格が劣る父と結婚したかといえば、母はある時私に「当時自分が嫌いな人と結婚せねばならなかったので、その人でなければ誰でもよいと思っていた時に、その頃球磨郡で農業をしていた父と結婚した」と話してくれました。

両親は加久藤で呉服屋をはじめましたが、番頭さんに騙されたこともあって、たきわって、島原時代の親戚で長崎市で米屋をしている人を頼って長崎に行くことになりました。厳しい生活が予想されるので、兄は母の里の黒肥地にあずけられ、次男一男は加久藤在の父の兄に子供がなかったので、強引に養子に迎えられ、結局父の父（祖父は父が好きだったらしい、祖母は父の兄が面倒をみることになる）、姉平田澄と私と妹(現岡本雪江)を連れて加久藤を出ました。たしか私（現在七四才）が四才か五才の頃のことでした。無一文だったので、当初長崎市築町在の米屋さんに大変世話になりました。

長崎に着いてしばらく大浦町に住みました。私は当時のことは殆ど覚えていませんが、初めて都会に出て珍らしかったのでしょう、母が私を前の方の担い籠にのせ、後には家財道具をのせて、大浦の坂道を登ったことを覚えています。生活が苦しかったので、母はかんかん船（当時長崎港には多くの外国船が寄港、ここで石炭を補給していた、かんかん船というのは団平船で石炭を満載し、蒸気船にひかれて外国船の横につけられた）の人夫になりました。母がその頃の話を時々聞かせてくれましたが、外国船に梯子をかけて、多くの人夫（全部女性）が梯子段の上にのり、あみ籠に入れた石炭を下から上の方に手渡しするのですが、新米の母はいつも一番きつい仕事、即ち団平船の石炭を籠に入れて、一番下の人夫に渡していたそうです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

その外に私の記憶に残っているのは、私が腹をすかしていたためでしょう、石炭揚げで全身真黒になった母が、焼芋を懐に入れて帰ってきたことです。

父は手先が器用で、中国人街の長崎市新地の中国人の散髪屋に弟子入りして、たしか三ケ月後位には稲田町で小さい散髪屋を開きました。

稲田町というところは、長崎一のスラム街でした。大正の初期第一次世界大戦で三菱造船所は急成長し、そこの労働者が多く住み、沖仲士、一匹狼のごろつき、最も値段の安いパンパンが住み、また島原などから流れてきた人々、女郎、芸者の玉子の少女など、それこそ日本の最下層の集落でした。夜ごろつき同志の喧嘩があり、月数回戸をしめることがありました。私の家その他五軒位は隣の大工さんの大家の店子でしたが、お互の祝いごと、葬式などの時は金を出し合い、力を出し合ってすませていました。労働者たちは一生懸命働きますが、稲田町から抜けだすことはできませんでした。大多数の人は人が良くて正直で、決して怠け者ではありませんでした。

兄は黒肥地村で小学校を卒業したので、少し生活にゆとりができた両親は兄をひきとりました。

この少年時代のスラム街での経験が、後年兄と私を共産主義者に導いた大きな原因と思います。

ある夜近所の大きな寺の火事があり、私たちは亢奮してその夜は眠れませんでしたが、兄は起きあがりもせず、ぐうぐう寝ていました。またある夜全身血だらけになって帰ってきましたが、兄は両親に崖から落ちて怪我したと言っていましたが、私は数人の同級生を相手に喧嘩したことを知っていました。

父はずっと前八一才で中風で亡くなりましたが、お人良しでしたが、向こう意気は強いくせに臆病で小心、権力に対しては反発する癖がありました。(理髪店の組合があり、その組合長に理由もないのに喧嘩しかけていましたが、その組合長は後年天皇の散髪屋になったので、私は父の心情を理解しました)

兄は私に「お前は親父そっくり、違っているのは学問があるのと、共産主義者になっただけのこと」と始終言っていました。臆病者の私が人一倍権力に立ち向かわねばならない共産主義者になったので、私は一生臆病とたたかわねばならぬようです。

母は数年前九一才で老衰で亡くなりましたが、気が強く、物事に動じない働き者で、貧乏を苦にしない、まことにどっしりした人柄でした。私は父の人の良さ、単純さは好きですが、尊敬するのは母です。兄は母の性格をそっくり受けついでいました。

父と母はよく喧嘩し、父は再々暴力をふるっていましたが、母は強い性格、父はその逆で、母は父によく協力していたのですが、元来父が弱いのではがゆいのでしょう、暴力に

訴えていたのです。母が父と終生苦労をともにし、仲良く過ごし得たのは、父の人の良さでした。

私の中学時代、兄はトルストイ全集を購読しており、兄にすすめられて私は「復活」その他短編を読んだことを覚えています。兄はトルストイを尊敬しており、私は兄からヒューマニズムの考え方を教わりました。兄も私もスラム街で育ったこと、それとトルストイの影響が、後年共産主義者への道を進ませたのではないかと思っています。

スラム街から抜け出すのには、子供に学問さす以外にないと両親は考えたようです。そんなことで郵便局に勤めていた兄は通信講習所へ、私は父の言う通り、医者になるため五高理乙に一九二七年の春合格しました。

さて私が入学した頃は、五高に戦前の有名な右翼大川周明が創設した「東光会」という右翼団体と、社会科学研究会がありました。当然の流れでしょうが、私は一年生の秋社研に入りました。最初の社研の学習会（五人位）で「日露戦争は帝国主義戦争だ、天皇はけしからん」という話を聞き、それこそびっくり驚天しました。それから一九二八年の秋、無産者新聞の配布で特高につかまり、翌年（一九三一年が満州事変）の紀元節の前夜、熊本市中に「帝国主義戦争絶対反対、社会科研究会万才」のステッカーを張りまわしたことがばれて、二年生の三学期一九二九年二月末に退校されました。

日和見をおこして黒肥地村の母の里にひっこんでいたら、同年四月十六日の第二次日本共産党大弾圧事件で、熊本市の警察署に一ケ月間ほうりこまれ、少々拷問されました。

その翌年偶然な機会で、私は久留米市の九州医学専門学校に入学しました。二年生の時そこの社研に入会したことがばれ、私も退校されようとしましたが、学長が好意的で私も詫びました。父は五〇才頃から隠居していたので、家で給料をとってくるのは兄だけでしたが、兄は二度の退校問題でも決して私を怒らず、「こんな時代だから、辛棒して卒業せよ」と言ってくれました。兄の給料で私は学校に行っていたのですから、普通なら兄は私に「勝手にせい」と放置するのです。私が今日医者になり得たのは、全く兄のおかげです。

戦争中兄は大陸に渡り、敗戦となり、兄の妻フミ、長女悦子、次女敏子ちゃんらは大連でとても苦労しました。その内容は聞いていますが、省略します。

私は一九四三年春応召し暁部隊（陸軍の海軍部隊、輸送船勤務）で、マニラ、ニューギニヤ、ラバウル航路で過ごしました。敗戦一年前陸に上がっていたので、生きて帰れました。

両親、姉、兄、妹の家族は、私が球磨郡免田町で内科を開業し、そこで一緒に暮しました。

一九五一年七月私は精神科医でしたので、熊本市に熊本保養院（精神病院）を開設しました。みんな速成の看護婦の免許をとり、保養院に勤めることになりました。この頃は朝

鮮戦争のさなかであり、「赤い」ということで銀行は一銭も金を貸してくれず、特高の弾圧はあるし、平田一家は懸命にたたかいました。もちろん他の職員もそうでした。その後若い医局員、経営幹部が新に戦列に加わり、全職員の奮闘で今日の熊本の民主医療機関を築くことができました。兄を中心とする平田一家は、民医連のみなさん、民主団体のみなさんのご指導、ご協力で、それぞれの第二世を学校に出すことができ、みんな立派な社会人に成長しました。

兄は戦前、戦後の苦労、保養院時代の苦労のなかで、共産主義者の道を歩みはじめました。保養院の事務長、医療法人芳和会の理事として奮闘し、晩年は幸せでした。肺癌に罹らねばもう少し長生きできたと思いますが、八〇才まで生きられたのであり、見事な生涯だったと思います。彼は最後まで熊本の民医連の発展を祈り続けました。

駄文をくどくど書きましたが、長年月お世話になった兄に代って、皆様に心からの御礼を申し上げます。

（一九八四・八・二六）

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.